

## チャレンジ！！オープンガバナンス 2018 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注1)	No.	タイトル	自治体名
	- (事務局用)	合併によって周辺部になった施設 (公共空間) を復活させるアイデア	熊本県玉名市
アイデア名 (注2) (公開)	鍋松原海岸で、鍋を投げて、鍋を食べる		

(注1) 地域課題タイトルは、COG2018 サイトの中に記載してある応募自治体の地域課題名を記入してください。

(注2) アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。

### 1. 応募者情報

チーム名 (公開)	鍋松原海岸活性化検討プロジェクト		
チーム属性 (公開)	<input type="radio"/> 1. 市民によるチーム <input type="radio"/> 2. 学生によるチーム <input checked="" type="radio"/> 3. 市民、学生の混成によるチーム		
メンバー数 (公開)	8名		
代表者情報			緒方祐希
メンバー情報	氏名 (公開)	津曲隆、黒田伸太郎、山口尚久、吉村裕子、藤本直也、多賀有紀、塘添大輔	

**(注意書き) ※ 必ず応募前にご一読ください。**

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2018\_応募用紙\_具体的チーム名\_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2018 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin\_padit\_cog2018@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：
 

「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示-非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。

(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)
4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)
5. この応募内容のうち、「自治体との連携」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様をお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。)

## 2. アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容、(2) アイデアの理由、(3) 実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

### (1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、課題解決のために、何をやる社会的なサービス（活動）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、魅力的で新規性があり、実践したり、活用したくなる、そしてその結果として、課題が解決される、そんなワクワク感のあるアイデアを期待します。2ページ以内でご記入ください。

<応募チームとして解決したい課題>

合併によって周辺部になった施設（公共空間）を復活させるアイデア

<解決アイデアの内容>

#### 【現状と課題】

玉名市鍋松原海岸は、合併して玉名市になった旧岱明町が整備した海岸である。熊本県の「海岸環境整備事業」として昭和63(1988)年に整備に着手し、600mの遊歩道と白砂を敷き詰めた人工ビーチが完成し、本格的な海水浴場として平成7(1995)年にリニューアルオープンした。

この海岸は、日本一の干満差がある有明海に面しており、一日2回、広大な干潟が現れる。干潟は、地元漁協のあさり貝の漁場となっており、漁業者の生業の場でもある。夏季は、熊本県最北の海水浴場として開放されており、物産館「磯の里」と、有明海の海水を沸かしたお湯が楽しめる入浴施設「潮湯」、そして宿泊も可能な休憩施設が隣接している。これらの施設は年間を通して運営されている。

鍋松原海岸は、干満の激しさから砂が巻き上げられ、海水の透明度は今一つである。このため、残念ながら、海水浴を目的とした海岸としての魅力は大きいとは言えない。熊本県内においては、海水浴客は外洋に近い熊本県南部の天草や芦北地域に向かう傾向がある。ここ数年の鍋松原海岸の海水浴客数は、約40日の海開き期間中、年間4,000～7,000人程度で推移してきた。

ただ、この問題は鍋松原海岸特有の問題というよりも、根本的にはレジャーとしての海水浴自体の魅力低下に原因がある。国内の海水浴客数は、ピークだった1985年の約3790万人から2015年には約760万人と約5分の1にまで減少しており、全国的に「海離れ」が起きている。この背景にはレジャーの多様化や質的变化があるとも言われている。

鍋松原海岸は、海水浴人気がピークだった頃に計画され整備が進められた。人気の低迷は、有明海沿岸という地理的不利もさることながら、「海離れ」というレジャーの変化の中で避けられなかったとも言える。近年のこの傾向を踏まえると、海水浴客をターゲットにしているだけでは、海岸の活性化は望めないことは明らかである。

#### 【解決のアイデア】

「海水浴場」という視点から離れた新たな価値、新たな枠組みを創造し、人々に魅力を提供していく空間へとリ・デザインする。そのためのキーになる概念として我チームが目指したのは「鍋」である。ありふれた家庭用品でもある「鍋」を、キー概念にして海岸利用を捉え直すことを提案したい。

注目した「鍋」とは、この海岸地域の地名である。その土地から継続的に価値を生み出していくには、誰でもがそこで行う必然性を感じるように、アイデアにはその土地に根付いた物語を組み込むことが大切であろう。地名は、この地域固有のものである。その地域で重要な意味を持っているはずである。

我がチームは、玉名市外部のメンバーを含んでいる。外部の人間たちがこの「鍋」という名称に強く惹かれた。特殊な地名であり、それに特別な物語が埋め込まれているように思えた。このために、地名の由来を市役所職員に対しヒアリング調査を行なった。その結果、予想通り、地名は特別な意味を持っていた。「鍋」の由来は、「景行天皇（12代天皇）がこの地においでになられたとき、隣接する長洲町腹赤地区で『腹の赤い魚』を献上した際、この地域からは鍋を差し出したこと」が由来とされていた。

鍋に特別な意味を持つこの海岸で、「鍋」を使った取り組みを創出していくのが今回のアイデアのポイントである。アイデアづくりの条件として、次の4つを設定した。

- (1) 季節と強くリンクしないようにすること
- (2) 継続できるように実行可能性の高い
- (3) 活性化の起点となるような催しの開催
- (4) 玉名との関連性の強いものを活用する

議論の結果、海岸の新しい活用策として

### 鍋松原海岸で、鍋を投げて、鍋を食べる

というコンセプト（テーマ）を今回考案した。

大声を出した後に、その土地特産の肉でバーベキューをするといった取り組みが九州内の地域にあるが、そういった取り組みに多くの人々が集まる傾向にある。「鍋を投げる（鍋投げ大会）」というのは、この土地にまつわる「鍋」を使ったゲームのひとつとして実施するもので、この土地にまつわる物語を活用した取り組みとして実施する。鍋をどれほど遠くへ飛ばせるかを競い合う競技や日頃思っていること（願い事や上司への不満、家族への感謝等）を鍋に込めて海へと投げ入れる競技等が想定される。鍋を投げる以外にも、鍋による海水運び大会等も考えられる。

このゲームの名称は、例えば、今年であれば「平成鍋合戦」あるいは新しい元号が決まればそれを含んだネーミングの「鍋合戦」にしてもよいだろう。

鍋合戦を楽しんだ後は、参加者全員で、夕日を眺めながら「鍋料理」を食べる。右写真は鍋松原海岸からの島原（雲仙普賢岳）に沈む夕日である。夕日を海岸から見る

ことができるのは西側に面した海岸のみであり、しかもその先に雲仙普賢岳があるという貴重な風景である。この風景をこの地の地域資源と捉え、併せて、旬の玉名地域の地元食材を使用し、夕日を見ながら鍋を参加者全員で楽しむという取り組みは、海岸の新しい利用、そして新たな価値を当該地域に提供できると考える。

このような現状で鍋松原海岸に多くの客を呼び込むには、海岸、そして周辺施設は海水浴のためのサポート施設という既存の枠組みから脱却し、海岸利用について新たなパラダイムを持ち込む、創造的破壊としての視点が必要であると言える。現状の施設を新しい視点で捉え直し、それらが地域社会にとって持続的で地域住民でも運用可能な身の丈にあったアイデアが望まれていると言える。



## (2) アイデアの理由（公開）

このアイデアを提案する理由について、それをサポートするデータを根拠として示しつつ 2 ページ以内で説明してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類の数値データやアンケート・インタビューなどの資料や関連の計画、既存の施策などの定性データのことを総称します。データは出所を明らかにしてください。

今回の「鍋松原海岸で、鍋を投げて、鍋を食べる」という新たなアイデアに至った理由は以下のとおりである。

### ① 夏季以外には利用がない

海水浴場として開放している時期（毎年 40 日程度）は、ここ数年 5,000～7,000 人程度で（1 日平均で 150 人程度）で推移しているが、それ以外の時期には海岸はほとんどが活用されていない。

次は鍋松原海岸を利用したイベントカレンダーである。

鍋松原海岸 2018 年イベントカレンダー

（玉名市役所地域振興課より）

開始日	終了日	件名	備考
6/24	6/24	鍋松原ボランティア清掃	60 名参加
7/1	7/1	九州看護福祉大学ボランティア清掃	サッカー部顧問：安藤先生
7/1	7/1	県地域振興局 地引網体験	
7/2	7/2	ビーチサッカー九州リーグ	
7/12	7/12	海開き安全祈願祭	
7/15	7/15	ペットボトルいかだづくり、サバイバルキャンプ	
7/22	7/22	岱明 SUN-CUP	
7/29	7/29	テレビ収録	アウトドアフェスに伴う告知用テレビ撮影
8/27	8/27	ビーチ de バレー	
10/1	10/1	キタクマ×アウトドアフェス	玉名市長杯ビーチサッカーフェスタウォーカーサバイバルゲーム

このカレンダーを眺めると、海岸を活用したイベントは海水浴場として開放している時期に重なっていて、海岸利用はほぼ夏場に限定されていることがわかる。さらにはスポーツ系に特化されたイベントが多く、来場する利用者層が限定され、多様な世代が楽しめるものになっていない。

この点、「鍋料理」は冬場に食べられることが多いゆえ、今回提案するアイデアは海岸の閑散期である冬場の有効な活性化策になると考えられる。

### ② 地域名「鍋」の由来

玉名市役所地域振興課職員に対するインタビューで、「鍋」という地名の由来は、景行天皇（12 代天皇）に遡ることがわかった。景行天皇の肥後巡幸の際、玉名市に隣接する長洲町腹赤地区で「腹の赤い魚」を献上した際、この地からは鍋を差し出したことが、地名の由来になっているということであった。

今回のアイデアのポイントは、他所で聞くことがあまりない「鍋」という地名に、こうした物語が存在している点に着目し、地名自体を地域資源と捉えるところにある。このことによって、「鍋」に起因する地域の物語という新たな政策展開



が期待できると考える。

### ③ 「鍋」を活用した競技を実施する理由

鍋は一般的な家庭の台所に必ず存在するであろうありふれた調理器具である。この身近な器具を、海岸という非日常の空間で競技用具として新たな意味を投影することで、多くの人が「鍋」に対する見方を変え、本政策によって展開する新たな競技を楽しんでもらえるのではないかと考える。また、鍋は用途別に様々な形態がある。鍋の形態に応じて、年齢や性別、体格などに対応させることで、発展的に本競技における「鍋」の応用可能性も考えられる。

さらに鍋料理は世界共通であり、本政策を継続・発展させる過程において、グローバルな参加者を募ることもできるだろう。外国人労働者や訪日観光客が増加する今日、国際交流は地方においても地域生活及び観光の両面で重要な課題である。身近な道具である鍋を活用した競技は、世界とつながる扉・架け橋となる可能性を秘めている。

### (3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法、アイデアの実現にいたる時間軸を含むプロセス、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、アイデア実現までの大まかな流れについて、2 ページ以内でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

#### ① アイデア実現に向けた流れ

##### (1) プロトタイプデザインとブラックティス

少人数で実践できるプロトタイプとして、鍋合戦及び鍋を食べる会をデザインする。

プロトタイプとしてのイベントには、プロジェクトチームメンバーが地域団体や地域住民等に呼びかけ、参加を募る。呼びかけに応じた参加者に対し、デザインしたプロトタイプを実験的に試行する。

##### (2) プロトタイプのリファイン（再設計）

実験に参加した地域団体関係者を交えプロトタイプの評価と改善を行う。本取組みは、毎週末ごとにでも実践できる比較的簡単な取組みであるため、繰り返しの試行が容易である。このため、課題改善は短期間に行うことができる。実験を繰り返し本取組みの完成度を高めていく。

また同時に、実験を行うことそのものが、「鍋松原海岸」を知らない周辺地域や住民への認知を拡大させることにつながり、海岸の新しい利用形態を広く周知していくことになる。

##### (3) 最終的なデザイン

実験によって得られた知見を踏まえ、「鍋を投げ、鍋を食べる」コンセプトを最も的確に表現するイベントの最終デザインを行う。

実験を通して一定の集客が見込めるようになった後、海岸に隣接する周辺施設管理者にイベントの取組みを委譲することで、鍋松原海岸を「鍋海岸」として安定的に運用し、地域での持続可能な自分たちの取組みとなるようなデザインを目指す。

#### ② アイデアの実現に必要な資源

本取組みにおいて使用する鍋は、イベント参加者の各家庭、各地域の特色ある鍋を持ち込むため、開催者側での準備は必要ない。また、今回のアイデアのもうひとつのポイントである玉名地域の旬の食材調達は、参加者から徴収する参加料でまかなうことで担保し、その参加料で隣接する物産館から材料を調達するという財源の循環を目指す。

#### ③ アイデアを実現する主体

プロトタイプとしてのアイデアの立案は、本プロジェクトが担う。

プロトタイプとしてのアイデアの具体的な実践は、本プロジェクトチームと賛同する地域団体と共に議論するなかで具体化していくことになる。

実験を繰り返した後、最終的には上記で述べたように実現主体を海岸の隣接施設管理を担っている物産館等の事業者としていくことが適当であると考えます。